

名詞の際は甲類假名で、動詞の語根の際には
乙類假名である二三の例に就いて

蓮 田 善 明

萬葉集卷五の「コ」の假名に於て一つの誤用がある。それは 899 (國歌大觀番號) の歌で、

術マも無く苦しくあれば出で走り去イなと思へど許コ(兒)ら
に障サマりぬ

の許である。子供の「子」「兒」の假名は甲類でなければならぬ。それ故勿論これは單に誤用又は混用としてよいやうである。ところがこの「コ」の假名について一つの問題がある。

「兒」「子」の訓假名として、萬葉集に、193 八多籠ヤタカゴ (の奴)

○「奴」の「コ」は卷十八に「故」(甲類)を用ゐてある。

「兒」「子」の通用(?)として

23 射等籠イラコカシマ荷四間

○卷一に「五十等兒乃鳥」の例あり。「伊良虞能鳥」「伊良虞鳥」の「虞」も甲類である。

3205 田籠タカゴ之浦

○卷三に「田兒之浦」「田兒浦」あり。他に、これに類する「田祐」「多胡」「多兒」「多古」「手古」等の「コ」、凡て甲類である。

のやうな「籠」がある。石塚龍磨も

籠の字は古のかり字にて通用するかななり、萬葉一ノ

十五丁に射等籠のしまとある、又同丁に伊良虞ともあり、これ古とかよふもじなるかゆゑなり、(假字遣奥山路

と言つてゐる。言ふまでもなく「古」も「子」「兒」の假字で

ある。「籠」を「コ」と訓むことは、和名抄に「和名古」とあ

るによつても知られる。萬葉卷頭の歌の「籠」も、

487 鳥籠之山

2710 鳥籠山

の訓も妥當である。この「鳥籠」は或はその意義と合す

るものかも知れない。

書紀に

肉入籠(蝦夷國此地名)此云之之梨姑(齊明紀五年)

玉代の家の八重古(籠の)の外(天智紀九年)

の「姑」「古」(甲類)が「籠」に當てられてゐる。

以上要約すると「籠」の音は甲類の假名を以て表され

る「コ」であつて、例外を見ない。ところが「籠」を動詞

名詞の際は甲類假名で、動詞の語根の際には乙類假名である二三の例に就いて

的に用ゐる時、その語根としての「コ」「ゴ」は又例外なく乙類である。

古事記・日本書紀の神代に、スサノヲノ命の「八雲立

つ」の歌に、

つま碁み(古事記)

つま語み(日本書紀)

とある「ゴミ」は「籠み」であると解せられて居り、恐

らくは誤解とも思はれない。その他、

許もりく・許もり妻・碁もれる(古事記)

ふほ語もり・御もる・虚もらせ・舉もりく(日本書紀)

許もらなむ(常陸國志記)

許め・其め・己もり・許もり(萬葉集)

等の例は皆乙類である。この動詞の語根が名詞の「籠」の

「コ」と同じであるかは、ここに一應吟味を要することと

なるであらう。併しその前に次の例を一瞥しておく方が

便利である。

2495 母が養子の眉隠カサコの「子」は「蠶」のことである。

2991 母が養蠶の肩隠
3258

の例もある「蠶」は和名抄に「和名加比古」とあるが、右の例の「蠶」は「コ」と訓むべきであることは「子」の字を當ててゐることによつても、又音數律の上からも考へられることである。「カヒコ」の「カヒ」に就ても觸れるべきだがこれは別に考へる。

和名抄で、同じく「カヒコ」と記してゐるものに「卵」がある。

1755 罵の生卵の中に

の「生卵」を「カヒコ」と訓むのもそれによる。今日「タヤゴ」といふ「ゴ」も意義的に右の「カヒコ」の「コ」と關係があらう。「蠶」が「子」に通ふ以上、「蠶」の「コ」が甲類であらうことは明かであり、「卵」に關する「コ」も恐らくは同じではないかと思はれる。ついでに「籠」に關係ある言葉と思はれる「箱」の「コ」も直接的な例ではないが、萬葉に「は姑ね(前根山。但し「箱根」といふ字が、その山名に當てられて誤りなものと見て)」の「山」と甲類の假名が當てられてゐることを蛇足として附け加へておく。

右に、甲類の「コ」の音をもつ「コ」なる二三の名詞を擧げた。即ち「子」「兒」「籠」「蠶」「卵」「箱」。これらの名詞の意義觀念にはすこしづつ聯關があることは感じられよう。「子」「兒」と「蠶」「卵」、又「籠」と「蠶」「卵」(「箱」併し)「子」「兒」と「籠」との聯關は一寸見出し難いと思はれるかもしれない。次に全體的にその聯關を考へてみよう。

「籠」「蠶」「卵」「箱」に共通する觀念内容は夫々或種の容器に關係してゐることである。「蠶」も「まよごもる」蟲として「コ」であると考へ得ないであらうか。實は「子」「兒」もこの容器の觀念に大きな關係を上古に於てはもつてゐたのである。所謂「身ごもる」母胎なる容器(?)以外に、「子」「兒」が籠つてこの世に生れ出てくる形式として古説話では、種々の容器を考へてゐたやうである。詳しく言へば「子」「兒」となるべき精靈が籠つて、その中で結實成熟しやがてその中から生れ出てくるといふ風に考へてゐた痕跡は、上古文學や民間傳承の研究によつて、證據は幾らも提示できる。但しここでは假名遣の問題か

ら餘り逸脱する故、舉例は控へたい。(柳田國男氏の「國太郎の誕生」はその有力な研究である。)

「籠」も、神代神話の「海幸山幸」で、山幸の海宮行き
の時の乗物が實に「籠」であつた。この海宮行きは、神
話傳承學的に研究すれば、山幸彦が海宮に行つて新しい
勢能を得られる、生命の復活的再生を語る一例話で、こ
れも上古人の生命觀念に於ける「こもる」意味を地にも
つた話なのである。それも詳しく論ずると長くなるから
やめるが、とにかく單なる竹製の籠も、かうした「コ」に
關してゐる一證がここに存することを知ることができ
る。

かうした「こもる」事實に關して、その一聯の「コ」な
る名詞を生じてゐるのである。唯、何故或る場合は容器
を或場合はその中にこもるものを「コ」といふか、等の
意義の檢究は右の説明は甚だ不完全であるが、私は「コ」
なる名詞の「コ」が「こもる」なる動詞の語根「コ」で
もあることを、從來さう信じられてきてはゐるが、假名
遣が甲乙に分れてゐるため、一應簡單に意義の檢討を試
みてみたまでである。とにかく「コ」と「ゴミ」「ゴメ」

「コモリ」との關聯は疑ひがたいやうである。
尙私はこの名詞「コ」が「ケ」(筈、字氣等)にも轉ず
る(?)やうにも思ふが、動詞の「コ」が「ク」にも轉ず
るやうに思ふ。

久美度邇興而(古事記上卷)

は「夫婦隠り寢る處」(古事記)と云ひ、「許母理の約りたる言」
とするよりは、「クミ」そのまま「コミ」の「コ」と通ず
るものではなかつたか。

八重の矩瀬智枳(武烈紀)

も「隱垣」とするまでもなく「隱垣」でよいのではない
か。

い久美竹 　い久美は寢ず……後も久美寢む思ひ妻あは
れ(記略)

の「クミ」も同じく「コミ」と通ずると見てよいやうで
ある。「物の彼と此と一ッに相交はる意にもあるべし」
(古事記)とし、「夫婦一ッに交はり寢るなり」といふのも一説で
あらうが、かうした「組み」の意味も「コミ」から出る
と考へることが可能である。書紀に「豊組野尊」(一書)は、

名詞の際は甲類假名で、動詞の語根の際には乙類假名である二三の例に就いて

「豊斟滄尊」ともあり、古事記では「豊雲野神」とある。この「クミ」「クム」「クモ」は單に種々の訛傳を生じたといふよりは、意義觀念上で通じ易いところもあつたのである。唯、記紀で當てられた漢字は稍一々に限定しすぎた嫌ひがあるやうに思はれるが、全く逸脱もしてゐないやうに思ふ。「雲」が單なる自然現象としてでなく、その雲の發生現象なり、立ちこむる姿に、物のきざし^し出で、又物をはぐくむといふやうな哲學的感知を得たのではな^いか。スサノヲノ命の「八雲立つ 出雲八重垣 妻ごみに 云々」に於ける「雲」と「妻ごみ」の結合には、單に偶然的でないものがありはしなかつたらうか。「斟」も水をくむことを「むすぶ」とも言ふやうに、何か哲學的な意味がこもつてゐるやうに思はれる。「つのがむ」「芽ぐむ」などの意味もこれと關係するところがありはしないか。古事記傳は「角ぐひ」「角凝魂」「角むすび」の哲學的關聯を説いてゐるが「クヒ」は「クミ」と關係なしとも爲難く「凝」が「コム」と關係あることも略々想像つく。「糸を相交へたるよし」(古事記)の「組」も、未だ混沌たる「混

み」の状態に於ける相交はりと通ずるところがあるやうである。俗に「これこれをこめて」と「合せて」の意にいふ「こめ」もこれに關係しよう。混沌・綜合・組成・凝結——かうした觀念が「コミ」「クミ」にふくまつてゐるやうである。神代紀卷頭の

渾沌如雞子、溟滓而含牙。

の原文は「三五曆記」から採つてゐるとは言へ、その訓の「ククモリ」「フクム」等には日本人の創世觀に妥當し、右の「クミ」に通ずるところがあるやうに思ふ。

さて右に、説明よりは例を擧げるにつとめてきた「クモ」「クム」「クミ」の「ク」が、どうやら「コ」(動詞語根として)に相通するものであるらしいことも、想像されるかと思ふ。尙「カヒ」を始め、數個の例を以て、ア列音に轉ずること及びケ(筭)に名詞コが通ずるらしいこと等も考へられ所謂母音諧調の問題の上から考察しても興味があると思ふが、これ以上に立入ることは今は省略したい。

さてかゝる「コ」が動詞の場合には何故に乙類の「コ」と發音となるのか。私はその理由を明かにする術^{ぎやく}を知ら

ないが、實例をもう一つ出さう。

それは「やど」「やどる」の「ど」で、右の「コ」と同じく才段の假名についてである。

これについては遠藤嘉基氏が説明は別だが、例としては挙げられたことがある。

「やど(宿)は、萬葉集に於て、

耶登(卷五)

夜杼(卷十五)

夜等(同)

の三例を除くと、他の八十以上の、殆ど各卷に互る用例は、すべて甲類を用ゐてある。意義的に「やど」が「やど」と分析すべきものか、どうか、またその「ど」が如何なる意味であるかは暫く問はない。常陸風土記に見える「夜刀神」が、「家門を破滅し云々」の神として「家門」に崇る神の意味であつたかどうか、それは別としても、とにかくこの「刀」も甲類ではある。有坂秀世氏の説によると、

甲類假字はア・イ・ウ及び同類のオ列音と併存し

名詞の際は甲類假名で、動詞の語根の際には乙類假名である二三の例に就いて

とあるのからみると、「イど」のどが甲類であるべきことが考へられる。尤も乙類も「少数はア列音と併存する」ので、絶對的とは言へないけれど。

ところが、動詞になると、

也杼里・夜杼里・也登里・屋杼禮里・屋杼禮流

等、假名書の十數列は、すべて乙類である。「夜・取」「屋・取」の記載もあるが、「取」の「ト」は、記紀でも甲乙亂混してゐるので、「取」のトであるか否かは分明し難い。

但し萬葉集では、一般に、十四・十五・十七・十八・十九卷では乙類、五・二十卷では甲乙混じて居り、五・二十卷を更に細かに見ると、卷五では、804 813 886 (三例) 889 が甲、804 904 (例外では¹⁰⁴の歌は) が乙、卷二十では、4415 4417 (何れも防人歌) が甲で、従つて卷五を除く他は大體乙類を用ゐてゐる故に「や・取」の場合には乙類の發音を用ゐてゐるのではないかと想像される。それは「やどり」と動詞になる時の「ど」が乙類であることと一致する。それ故に「やどり」も「やど」とは別系のものではないかを一應考へてみる必要がある。即ち右に擧げたやうな「や・取」的に記されて

ゐるのを見ると「やど・り」でなく「や・どり」の感が存したことも否定できない。併し「宿」の例、「所宿有」(卷十)もあり、僅か四例の「や・取」によつて「や・どり」と決するわけには行かぬ。大體は「やど・り」としてよからうと思ふ。そして名詞の「やど」と動詞の「やどり」の「やど」とは別語ではないと考へても甚しく危険ではなく、思ひきつて言へば同じであるとした方が正しく、唯名詞と動詞とによつて生ずる變化としてみたのである。

私がこの事實について發見した例は以上の「コ」「ヤド」の二例にすぎない。卷五で一例づつ名詞の場合に乙類を以て記したのも、陥り易い混亂と見なければならぬ。尙、ついでに、も一つ疑似的な例を挙げよう。

それは「夜」についてである。「夜」は甲類である。ところが、「夜見」とつづける例がある。出雲風土に「夜見嶋」がある。これは「黄泉嶋」を利かせてゐるのではなからうか。

「黄泉國」を、古事記傳では、豫母都志許賣、又書紀に余母都比羅佐可など、例多き

に依て、豫母都久爾と訓つと「ヨモツクニ」と訓んでゐるが、

豫美能久爾とも、豫美都久爾とも訓べし、與美津と云

ことは祝詞式に見ゆ、(註・滅火祭祝詞に「與美津根」とある)

とも云ひ、

たと黄泉とのみあるは豫美と讀べし

とて、萬葉の例(但し、假字書)、源氏物語夕霧卷の「よみぢのいそぎ」榮華物語音楽卷の「よみつと」の例も引き、

名義は、口決に夜見土とある、土字は非なれど、夜見」はさも有りぬべし、

と「黄泉」に「夜見」と考へ、

下文に燭ヒトツトモシテ一火とあれば、暗處と見え、又夜之食國を知看月讀命の、讀てふ御名も通ひて聞ゆればなり、

といつて、「讀」と通ふよしも言ひ及んでゐる。「夜」「夜見」「黄泉」「讀」を結びつけるのは俗解的附會の嫌ひがないでもないが、上古人は、俗解にせよさう意識してゐたかも知れない。書紀では月神を、本文で

月神一書六月月尊、月夜見尊、月讀尊、

と記し、一書(第二)は「月弓尊」、(第六)は「月讀尊」、(第十二)は「月夜見尊」と記してゐる。

ところがこの「夜」と「夜見」讀」との間に假名遣上の差別がある。

夜(甲)

3245 月夜見の

670 月讀之光

985 月讀壯士

(甲乙
不明)

3599 月余美のひかり(乙)

となつて居り、「讀」は「數」に通ふとすれば、「餘美」「余米」

なども参考とすべきだが、これ又乙類である。

かくて「夜見」と續けられた時の「夜」は甲類の發音でなくて、乙類の發音ではなかつたかと思はせられるのである。尙「ヨモツ」の際の「ヨ」も前掲の例(記傳所引)の他、

譽母都併遇比(書紀)
ヨモツヘダヒ

も乙類である。

この「ヨ」「ヨミ」の例もオ例音に於て起つてゐる現象である。

而しても一つ注意されるのは、「月弓尊」の定くウ列音の「ユ」に轉じ易いことで、これも「ヨ」が「ク」に轉じたのと似てゐる。法則的に言へばかかる「ヨ」は甲類であるべき筈である。

さて私は以上二三の例を挙げ得たにすぎないが、もつと調査すれば尙幾らかの例と、その間にひそむ國語學的法則を掴み得るかもしれないが、今のところ實例提示以上私の研究は進み得ない。とにかく今まで發見した右の例は何れもオ列音に於て起つてゐる現象である併しオ列音の場合に於てもこの現象が決して通例ではないやうである。とにかく今は取敢へず報告しておくにとどめる。

名詞の際は甲類假名で、動詞の語根の際には乙類假名である二三の例に就いて